

マンガなんか読まずに
本を読めとか
言う人のことを
分析してみた話

みどりのくま



夢中になってマンガを読んでいたら、「マンガなんか読んでないで本を読みなさい！」という声が聞こえる。

私が子供の頃にも、こういうことを言う大人がたくさんいました。

あれから幾星霜、いまだにこういうことを真顔で言う人がおります。

放っておいてくれというのが本音ではあります。が、しかしこういうことを平気で或いはエラそうに言う人の、その心とははたしてと考えるとこの短文を書きしてみようと思ったのです。



表紙は、安永航一郎先生の「県立地球防衛軍」に登場する、悪の秘密結社・電柱組の戦闘員(下っぱ)の模写です。

わたしの好きなマンガの一つです。

まずは、マンガを読むことと本を読むこととの違いというものがはたして有るのか無いのかについて、私なりの考察をしてみます。

よく言われることは、文字で物語を読むときには情景を自ら想像をして作り出して理解するけれども、マンガの場合には「画」が与えられてしまうことで想像を働かせることをしなくていいという話があります。

「映像」を想像力で創造する力が育たないからマンガはダメなんだという論理です。もちろんこの理屈に依ると、映画もテレビも”文字以外”のメディアは全部ダメなのだという事になってしまうからそもそも乱暴な物言いなのだけれど、しかしここは本当にそうなののかについて少し考えてみたいのです。

文学を読む行為は、文字からイメージする「映像」、それは体験に基づく連想ということですが、それは同じ作品であっても読む人によってそれぞれ独自の「映像」作品に脳内で変換して楽しんでいるということになるでしょう。

それに対してマンガに限らず映像込みで提供される作品は、誰が視ても同じ作品は同じ映像で構成されたものであるのだから、誰もが同じ印象・同じ理解をするのかと考えると決してそうではないことは明らかでしょう。

それぞれの主観で作品を視ることが一番大きいけれど、実はそれだけではないように思うのです。

それは、映画について語られるときに、フィルムのコマとコマの間にある暗闇に視る人の想像力が生み出す「撮られなかった画」をつなぎ合わせることで映画は出来上がるというとてもロマンティックな表現があります。

最新のデジタル撮影であっても、秒間何コマという静止画を高速で変更することで生まれる「残像」を使って動く画にしていることに変わりはありません。

このイメージをマンガに援用して考えてみれば、やはりコマとコマの間には「描かれなかった画」があってそれを頭の中で補完して読んでいるとすることができるのではないのでしょうか。

つまりはマンガを読むときもやはり読者の体験に基づく連想を加えながら読んでいるのであって、決して文学を文字で読んでいることと大きな違いはないはずなのです。

さらに言うならば、文学を深く楽しむ秘訣として「行間から作者の意図を読み」とい

うことがあります、これは本を読む「技術」を高めることで作品をより楽しめるということを表現する比喻だと思います。

これをマンガに当てはめてみれば、マンガをたくさん読んで「技術」が向上すればするほど、マンガを読んでいるときそれがまるで動画のように動きだし、モノクロのページはカラーとなり、物語に没入して至福の時間を味わうことができる。

文学の楽しみとマンガの楽しみは同じ傾向を持つと言えるのではないのでしょうか。

次に、本を読めと言う人の「本」とは一体何のことであるのかについて考えてみたいのです。

本を読めと言う人の全てがそうであると断定することはできないことをはじめにお断りしたうえで、たぶんこういう人に言われるとイラッとするだろうなという想像で話をします。

彼らが言う「読書」について考えてみると、たいていの場合には「ためになる本」を読むことを指しているのではないのでしょうか。

彼らの言う「ためになる本」とは、たいていの場合には、原書をわかりやすく大事なところだけ抜き出した実用書のことではないかと思う。

そして、そういったたぐいの本を読むというときそれは勉強するという表現がいちばん近いのではないかと思う。

そういった本は、読むというより「覚える」という表現が適切だと思う。

なぜなら、受験勉強のときに用いる参考書を読むときそれを「読書」とは呼ばないからです。

もちろん、必要のために勉強するために本を読むことを否定したいわけではありません。ただ、それは楽しみのための読書ではないということです。

そして、本を読め！と言う人の中にいる、こうした「ためになる本」を読めと言う人に問いたいのは、あなた自身は本を読むことが好きですか？ということなのです。

あなた自身は、本を読むことを楽しんでいますか？ということなのです。

マンガをバカにして本を読めと言う人は、ではご自身は本を読むことを楽しんでおられますかという疑問から、こういうことを言う人の心の中を想像してみることにします。

その心の中では、たぶん本を読むことを「～ねばならない」事の一つ、つまりは修行の一つのように捉えているのではないかということです。

大人になるために身に付けなければならないことのための止むを得ない課題、やらなければならない義務、そういったものの一つに「本を読む」ということを数えているのではないかと思うのです。

こうした論拠から本を読むことを勧められても、素直に受け入れることはできないのです。

マンガのことを悪く言うのならば、それに見合うだけの読書の楽しさを語ることは必要最低限のことであろう。

さらに付け加えて言うのならば、これはもうマンガと読書の話を超えて一般的にイラッとさせられる物言いの話となるのだけれど、他人のやることにとやかく言う人の心理を想像してみたいのです。

つまるところ、こういう物言いをする人は、自分の内側にある不満（今回の場合は、楽しそうにしてる他者と比較して自分はちっとも楽しいことがないという不満）を他者にぶつけることで、自分の外側に転嫁することで解消したいという欲求を満たしたいという動機がまずあって、そのために合理的に見える理由をでっちあげて他者を攻撃するということではないかと考えるのです。

もし本心がそうであるのならば、これは単なる言いがかりにすぎないということになって、これは単なる迷惑な話であるということになるのです。

最後に結論めいたところに話をもってゆかなければならないわけであるけれども、それはだいたい次のようなことではないだろうか。

「あなたの為を思って言うのですよ」といったたぐいのことを、先輩であるとか上司であるとか目上の人から言われる機会があります。

もちろん、心底から心配をして言ってくれることについては、たとえそれが要らぬお節介であったとしても、ありがたく受け取ることは大事なことであるから、そこは誤ってほしくないということは大前提としてあります。

しかし、時としてそうした仮面を被った、言っている当人も全く気が付いていないものも含めた、「悪意」というものが紛れ込んでいることは知っておかなければならないでしょう。

今回は、マンガのことを深く知ろうともせず表面的イメージだけで批判する人の浅はかさを例に挙げて話を進めてくるなかで、そもそもマンガ批判を装った単なる中傷も紛れていることを指摘しました。

こういった、聞く価値の無い批判を選別出きるだけの知恵を身に付けなければならないのだと思います。

そしてその知恵は、あなたがいま夢中になるジャンルから直接的にも間接的にも受け取ることが出来て、自然と身に付けることが出来るものだと思うのです。

そして気をつけなければならないことは、聞く価値の無い批判に、ただ感情的に反論することは避けるということです。

そうしなければ結果的に、あなたの愛するものをあなた自身が穢してしまうことになる。そればとても悲しむべきことであると思う。

そして、これこそ要らぬお節介そのものなのですが、本当に夢中になれるものを持っているあなたはそうならないことを信じて、この話を終わることにします。

最後までこんな拙い文を読んで下さったあなたに感謝します。

マンガなんか読まずに本を読めとか言う人のことを分析してみた話

<http://p.booklog.jp/book/106978>

著者：みどりのくま

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ktnwtuy001/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/106978>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/106978>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ